

## 教授学習過程における道德観の伝達感評価尺度の構築 —自己開示の有無による対話の伝達感の相違の実験的検討—

### Development of a Scale for Feeling of Transmission for Evaluating Transformation of the Morality in Teaching Process -Experimental Investigation on the Difference in Feeling of Transmission in Communication with Self-Disclosure-

下田 香織<sup>\*1</sup>, 田和辻 可昌<sup>\*2</sup>, 松居 辰則<sup>\*2</sup>  
Kaori SHIMODA<sup>\*1</sup>, Yoshimasa TAWATSUJI<sup>\*2</sup>, Tatsunori MATSUI<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>早稲田大学人間科学部人間情報科学科

<sup>\*1</sup>School of Human Sciences, Waseda University

<sup>\*2</sup>早稲田大学人間科学学術院

<sup>\*2</sup>Faculty of Human Sciences, Waseda University

Email: nksk-ab@ruri.waseda.jp

**あらまし**：道德教育では、生徒教師間の対話において、伝達度のみならず伝達感が十分に保持されることが重要であると考えられている。そこで本研究では、自己開示促進度の異なる2種の課題を用いた2者対話実験を行い、課題内容の相違が話者の伝達感・伝達度の評価に影響を及ぼすのかを調査した。本稿では、得られた知見とそれらを明確にするための要件を整理する。

**キーワード**：伝達感、伝達度、親密感、自己開示

#### 1. はじめに

教育場面では、自身の情報、思考、過去の経験、願望などの自己開示内容を含む対話が重要であると考えられている<sup>(1)</sup>。特に、道德・倫理教育場面では、教師生徒間の対話は自己開示性を高めるという観点から、より効果的であると考えられている<sup>(2)</sup>。

また、一般に、話者の思考や願望といった、感情的情報の伝達手段としては、対面コミュニケーションがふさわしいと考えられている。これは、話者の伝達感（伝達内容が双方ともに「伝わった」と感じる程度）に関連すると考えられている<sup>(3)</sup><sup>(4)</sup>。自己開示等の、個人的な感情情報の伝達場面では、話者はより強い伝達感を覚えると考えられる。このことから、道德教育場面での対話の効果を検討するに当たって、話者の伝達感の主観的評価が重要であると考えられる。

道德教育の問題点の1つとして、その効果を検討する具体的な尺度が存在しないことが挙げられる。道德教育の一環として行われる対話について、伝達感評価尺度を構築することは、この問題に対し、新たな知見を提供できると考えられる。

そこで本研究では、特に、対話中の自己開示の深さに着目し、自己開示促進課題（課題Ⅰ）と自己開示非促進課題（課題Ⅱ）の2種を用いた対話実験を行い、課題内容の相違が被験者の親密感・伝達感の主観的評価に影響を及ぼすのかを調査した。

#### 2. 方法

##### 2.1 被験者

本実験の被験者は大学生12名（男性5名、女性7

名）であった。被験者を6名ずつのグループに分け、初対面同士の実験ペアを作成し、グループごとに自己開示促進性の異なる課題を課した。

##### 2.2 実験手続き

Aronの実験<sup>(5)</sup>を参考に、親密感・自己開示促進度の異なる質問内容を含む2種の課題を作成し、インタビュー形式の2者対面実験を実施した。被験者は課題に沿って互いに質問・回答を繰り返した。相手の回答内容に対する反応に制約はなく、相槌をうつ、気になる点をさらに質問するなど、被験者は比較的自由的な条件で自然な対話を進めることができた。

本実験では、課題の前後で質問紙による調査を行った。課題前の質問紙調査では親密感のみを調査し、課題後の調査では親密感・伝達感・伝達度を調査した。親密感の評価はAronらの実験<sup>(5)</sup>と同様に、IOS尺度（2項目）・SCI尺度（2項目）を用いて行われ、伝達感の評価には7件法を採用した。伝達度は、被験者報告による実験相手の回答内容と、実際の回答内容に異なる点があるかによって、5点満点で評価された。

また、本実験では、被験者の自己開示性の促進のみに焦点を当てていたため、Aronの実験<sup>(5)</sup>で用いられた、課題内容とは異なる幾つかの質問項目を抜粋したものを、事前課題として課すことで、2種の課題間の親密度評価を一定にすることを試みた。さらに、実験以前の被験者同士の関係性の影響を考慮し、実験ペアを初対面同士の人間に限定した。

実験終了後、課題内容の相違と、課題前後の親密感評価の変化の相違という2つの観点から、被験者の伝達感の主観的評価への影響を調査した。

### 3. 結果

#### 3.1 課題内容の相違による比較

質問紙調査から得られた6つの尺度の得点平均を、課題別に表に示す(表1)。被験者の主観的親密感は、双方の課題で4項目共に同程度上昇した。これにより、事前課題による効果が確認でき、課題間の相違は自己開示促進性のみと考えられた。

しかし、2種の課題間で、伝達感、伝達度の評価は同程度であり、自己開示レベルと伝達感・伝達度の関連を確認することはできなかった。

また、本実験の結果には、年齢、性別の違いによる影響は見られなかった。

表1 課題別平均得点

質問項目	課題Ⅰ	課題Ⅱ
IOS-1 (課題前)	3.33	2.67
IOS-1 (課題後)	3.83	3.17
IOS-2 (課題前)	4.33	3.83
IOS-2 (課題後)	4.50	4.17
SCI-1 (課題前)	3.33	3.83
SCI-1 (課題後)	4.17	4.33
SCI-2 (課題前)	2.67	3.17
SCI-2 (課題後)	3.33	3.83
伝達感得点	5.50	5.67
伝達感得点	4.60	4.17

#### 3.2 親密感評価の変化による比較

被験者の主観的親密感は、2種の課題間で同程度上昇した。そこで、2グループの被験者の得点を統合し、課題前後での親密感評価得点の差(4項目の差の合計)と伝達感評価得点の比較を行った(表2)。その結果、両項目に主だった関連は見られなかった。

なお、課題前後での親密感評価得点差が0点の被験者は存在しなかった。また、得点差の等しい被験者が複数存在した場合は、該当する被験者らの伝達感評価得点の平均値を代表値としている。

表2 親密感評価得点の差との比較

親密感評価得点の差(点)	伝達感得点(点)
-1	5.50
1	6.00
2	5.50
3	5.33
4	5.67

### 4. 考察

実験の結果、自己開示の深さが異なる2種の課題間で伝達感評価得点に相違が見られなかった。そのため、対話における自己開示の深さと、話者の伝達感の関係を明らかにすることはできなかった。また、被験者の、課題前後での親密感評価得点の変化と、伝達感評価得点の間でも特に関連が見られなかったことから、話者の伝達感と、主観的親密感の関連も

明らかにならなかった。

本研究では、自己開示の深さを対話課題の内容の相違によって操作することを試みた。しかし、本実験は被験者に対する制約が少なく、比較的自由的な対話が認められていた。そのため、自己開示非促進課題においても、被験者がある程度の自己開示機会を得てしまっていたと考えられる。本実験で使用された2種類の課題では、自己開示の深さと伝達感の関連を十分に評価できていない可能性がある。

また、本実験は被験者数が十分でなく、実験時、被験者の自己開示の深さの測定も行っていなかった。そのため、被験者の対面コミュニケーション時の自己開示・自己呈示傾向等の個人的性格の影響を十分に考慮できていなかった可能性が高い<sup>(6)</sup>。

伝達感測定尺度に関しても、被験者の評価得点が局所的であったことから、本実験で使用された7技法を用いた尺度は、対面時の話者の伝達感を評価する上で、適切ではなかったと考えられる。

### 5. まとめと今後の課題

本研究では、自己開示の深さが異なる2種の課題を作成し、話者の伝達感・伝達度への影響を調査した。その結果、自己開示の深さや主観的親密感と、話者の伝達感・伝達度の間関連を明らかにすることはできなかった。

しかし、本実験で使用された2種類の課題では、自己開示の深さと伝達感の関連を十分に評価できていない可能性がある。この点に着目し、今後は、被験者数を増やし、1種の課題内で被験者の自己開示の深さと伝達感の関連を調査するなど、新たな実験計画を検討する必要がある。

また、自己開示の深さや自己呈示効力感、伝達感など、測度をより充実させた実験的検討を行うことも重要である。

#### 参考文献

- (1) 木村優: “中学校教師が生徒に対して行う自己開示”, 教育学研究, 第76巻, 第1号, pp.33-43 (2009)
- (2) 堀田竜次, 假屋園昭彦, 丸野俊一: “道徳の授業における対話活動が道徳性の変容に及ぼす効果”, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 第17巻, pp.195-211 (2007)
- (3) 杉谷陽子: “インターネット上の口コミの有効性: 製品の評価における非言語手がかりの効果”, 上智経済論集, 第54巻, 第1・2号, pp.47-58 (2009)
- (4) 原邊祥弘: “対人場面における感情情報の伝達誤差-感情伝達に対する情報濾過機能の検証-”, 帝塚山学院大学人間科学部研究年報, 第17巻, pp.24-31 (2015)
- (5) Aron, A. and Melinat, E. and Aron, E.N. et al. : “The experimental generation of interpersonal closeness: A procedure and some preliminary findings”, Personality and Social Psychology Bulletin, 23(4), pp.363-377 (1997)
- (6) 杉谷陽子: “メールはなぜ「話しやすい」のか? : CMC (Computer-Mediated Communication) における自己呈示効力感の上昇”, 社会心理学研究, 第22巻, 第3号, pp.234-244 (2007)